

第7回大会は、平成20年に学会となり初めて開催された第1回全国大会（佐賀県武雄市）以来7年ぶりに九州の地、福岡県朝倉市で開催された。台風の進路が心配されたが、幸い会場となった甘木にはその影響は少なく、熱心な発表、協議がなされ、充実した大会となった。

日本個性化教育学会 第7回全国大会（九州大会）



○テーマ「子ども一人ひとりを大切にするという原点に立ち返って」

○期日 2014年8月9日（土）・10日（日）

○会場 福岡県朝倉市 ピーポート甘木

○日程 1日目 8月9日（土）

9:30～ 9:45

開会行事

9:45～10:45

講演1 「子ども一人ひとりを大切にするという原点に立ち返って」

奈須正裕（上智大学）

11:00～12:00

講演2 「学力向上と学習の個性化」 佐藤 真（関西学院大学）

13:15～16:30

分科会・自由研究発表

《分科会A》

「子ども一人ひとりを大切に
する生活科・総合的な学習の実際」
コーディネータ

谷口育史（近大姫路大学）

実践報告

松野久予（佐賀県伊万里市立
波多津小学校）

中原嘉孝（佐賀県伊万里市立
大坪小学校）

田中 誠（福岡県朝倉市立
十文字中学校）

《分科会B》

「子ども一人ひとりを大切に
する支援困難な状況への対応」
コーディネータ

光武充雄（九州個性化教育学
会会長・臨床心理士）

実践報告

中山靖子（福岡県）

石丸敏子（佐賀県）

《分科会C》

自由研究発表

コーディネータ

高浦勝義（明星大学）

浅沼 茂（東京学芸大学）

研究発表

浦郷 淳（佐賀大学文化教育
学部附属小学校）

佐野亮子（東京学芸大学）

王 蕾（関西大学大学院）

藤原靖浩（大阪市立大学）

16:40～17:10 会務総会

2日目 8月10日（日）

9:00～12:00

分科会

《分科会D》

「子ども一人ひとりを大切に
する教科学習の実際」
コーディネータ 佐野亮子（東京学芸大学）

実践報告

手島孝之（福岡県朝倉市立朝倉東小学校）

石田周一（大分県佐伯市立伯南中学校）

五十子晴美（元東京都台東区立東泉小学校）

《分科会E》

「『語り合おう』子ども一人ひとりを大切に
する支援困難な状況への対応」

コーディネータ

光武充雄（九州個性化教育学会会長・臨床心理士）

実践報告

中村玲子（佐賀県）

- 13:00～15:45 シンポジウム「子ども一人ひとりを大切にするという原点に立ち返って」
 コーディネータ 河原俊彦（佐賀県教育センター）
 シンポジスト 成田幸夫（岐阜聖徳学園大学）
 澤田 稔（上智大学）
 猪股亮文（仙台市教育委員会）
 田島隆一（佐賀県嬉野市立嬉野中学校）

15:45～16:00 閉会行事



講演1 子ども一人ひとりを大切にしているという原点に立ち返って 奈須正裕（上智大学）

前半では、学力論の系譜を「内容」（領域固有の知識・技能）を基盤としたコンテンツ・ベースと「資質・能力」（思考力・意欲・社会スキル）を基盤としたコンピテンシー・ベースの2つに整理し、「何を知っているか」を主要な問いとするコンテンツ・ベースの教育では、知識の主體的で個性的な活用・創造が駆動する「知識基盤社会」にはおおよそ対応できず、今後の学校教育は「どのような問題解決を成し遂げるか」を主要な問いとするコンピテンシー・ベースに移行せざるを得ない社会状況にあることが、海外の事例を



紹介しつつ示された。

後半では、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」の報告に即して、コンピテンシー・ベースの学力論を、①領域固有知識、②教科の本質、③汎用的スキル、④メタ認知の4水準で整理し、個性化教育が積み上げてきた理論的・実践的成果との関連と残された課題にも触れながら、それぞれの育成のあり方に関する実践的提案がなされた。

まず、領域固有知識については、B問題の不振ぶりが示唆する通り、手続きとしてではなく、意味としての学習が今後に望まれるが、特に有望なのはオーセンティック（真正の）な教材や文脈での学習指導である。次に、教科の本質については、たとえば理科における実験や観察、得られたデータの処理など、日本の授業は子どもに相当な経験を提供してはいるが、概して「明示性」が低く、また授業のまとめはコンテンツのみ（直列つなぎの方が明らかな等）で行われるので、子どもに教科の本質（実験的比較による科学的探究の方法等）に関する明晰な自覚的理解をもたらさず得ていない点に課題がある。さらに、汎用的スキルやメタ認知も同様で、系統的に経験を提供し、その意味するところを「明示的」に教え、検討する機会を設けることにより、一人ひとりの子どもが「道具」として使いこなせる水準にまで高めることが今後求められる。（文責 奈須）

講演2 学力向上と学習の個性化 佐藤 真（関西学院大学）

学校教育法においては、基本的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主體的に学習に取り組む態度を養うことが規定されている。そうした学力を向上させる方策として、(1)授業等で学級やグループで話し合う活動、(2)言語活動に重点を置いた指導計画の作成、(3)総合的な学習の時間における探究活動の積極的な実施、(4)授業の冒頭で目標を子どもに示す活動や授業の最後に学習したことを振り返る活動が、効果のある指導方法であると国立教育政策研究所の分析により明らかにされた。

学力No.1の秋田県では、その特徴の一つとして、この(4)「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動」を重視している。具体的には、導入においては、課題（本時のめあて）を子どもの疑問や前時との



違いから、子どもが自分のものとして捉えることのできる工夫をする。展開においては、ねらいに迫るために自力解決や学び合いを充実することをめざす。終末においては、集団の学びを個に返し、一人ひとりが学びを充実し、本時のまとめを言語化し、自分が本時、「分かった」「出来た」と賢くなったことを実感することをめざすという授業改善を、地区の小学校が連携をして取り組んでいる。

また、秋田県では、全国と比べ、(3)「総合的な学習の時間」の活動を多くの児童が取り組んでいる。このような総合を中心とした探究的な学習が学力向上につながってきた。なぜなら、探究における問題解決の過程を振り返り、どうしてこのような結果が導き出されたのかということ問い、その理由や根拠を子どもに説明させる。すなわち、自分の思考過程を振り返り、自分自身で理解と納得を得る授業を展開しているからである。

以上のような学習では、当然、一人ひとりの個人的な持ち味とも言える個性が開花しながら進行しているといえるだろう。(文責 大野)

分科会A 子ども一人ひとりを大切にする生活科・総合的な学習の実際

コーディネータ 谷口育史 (近大姫路大学)

実践報告・協議：「一人ひとりが生き生きと活動する生活科」松野久予 (伊万里市立波多津小学校)、「夢や目標に向かって努力する心情や態度を育てる指導の工夫」中原嘉孝 (伊万里市立大坪小学校)、「個が生きるキャリア教育」田中誠 (朝倉市立十文字中学校) の実践発表があった。今回期せずして、いずれもキャリア教育の実践になってしまったが、どの報告もよりよく生きようとする生き方についての視点にたった発表であった。どの学校も総合的な学習の全体計画とその実際がはっきりとカリキュラムに位置づけられ熱心に推進しておられる事が発表の端々から感じ取られた。生活科では、交流を通して子ども一人ひとりが生き生きと活動し、自分の頑張りや成長を感じ取れるように具体的な手立てが用意されていた。また、総合的な学習「波多津よかといちどはおいで」では地域の良さを発見する活動を通して地域の人と接し、その思いに触れる活動を通して、よりよく生きようとする実践的な態度の育成が目指されていた。



中学校では、福祉体験・職業体験・キャンパス訪問等、自分の将来に対する思いや願いに直接触れる活動を通して、生き方について考える機会とし、高い理想や夢を持たせる工夫がなされていた。協議では、まず具体的な手立てについての質問応答等がなされた。その後、経験したことを自覚化、言語化し、活用する上で、単元計画の中に話し合い活動の位置づけが重要であることが指摘された。また、子どもたちの思いや願いを大切にし、問題解決活動を進めるためのグループ編成や話し合い活動についても意見が出された。活動あって内容なしの生活科・総合的な学習に陥らないためにも大切な内容であった。(文責 多田)

分科会B 子ども一人ひとりを大切にする支援困難な状況への対応

コーディネータ 光武充雄 (九州個性化教育学会長・臨床心理士)

実践報告・協議：この分科会Bは、学校現場が、子どもたちの発達及びその個人差への対応等、指導支援が困難な状況を呈している実情に応じようとしたものです。特に、特別支援教育には限定せず、通常学級における指導支援のあり方や、学校全体の組織的対応等の領域に焦点を当てました。まず、福岡県の中山靖子先生から、「感情をコントロールする力を高めるための、個に応じた指導～家庭・在籍学校との連携

を通して～」として、通級学級での取り組みをご発表いただきました。コミュニケーションスキルを高める、相手を意識したドア開閉時の所作の学習、小グループでの「缶運び」を通した意思交流の促進、姿勢



を保つための滑り止めシートの活用、めあてや活動メニューの視覚的な提示、「ビー玉ころころ」の遊びの開発と、それを通した眼と手の協応や集中力の持続をねらった活動、視覚的にわかりやすく工夫したカードによる拗音や促音の読みの練習、保護者との連携及び課題への介入等々、たいへん貴重なご提案をいただきました。こうした個に応じる支援が、通常学級の先生方にも広がり、支援チャンネルが豊かになればと思うばかりです。

次に、佐賀県の石丸敏子先生から、特別支援教育コーディネーター及び教育相談担当の立場から、指導支援困難な子どもたちに対して、学級担任としての理解と関わり方、級外職員や生活支援員等とのチーム支援の組み方、学校全体としての組織的な対応、保護者、病院等の他機関、スクールカウンセラーとの連携等々、小5男子への取り組みを、低学年から高学年までを縦断的に振り返りながら、そこに立ちはだかった問題や、改善すべき課題等を浮き彫りにしていただきました。ご参加の先生方からの質疑も活発に行われ、具体的な観点から討議でき、たいへん有意義な分科会となりました。(文責 光武)

分科会C 自由研究発表 コーディネータ 高浦勝義(明星大学) 浅沼茂(東京学芸大学)

- ◎児童の発言を引き出す授業づくりに関する研究 — 2年生算数科での電子黒板の活用を中心として— 浦郷淳 (佐賀大学文化教育学部附属小学校)
- ◎大学と小学校の協働による学習環境に関する実践的研究— オープンプランの校舎を活かす校内研修の充実— 佐野亮子 (東京学芸大学)
- ◎中国の素質教育に芽生える個性化教育 王 蕾 (関西大学大学院)
- ◎地域組織を活用した個性化教育の試行錯誤 藤原靖浩 (大阪市立大学)

分科会D 子ども一人ひとりを大切にす教科学習の実際

コーディネータ 佐野亮子 (東京学芸大学)

実践報告・協議：本分科会では3つの実践発表が行われた。石田周一氏(大分・佐伯南中「楽しい授業、力をつく授業の創造」)は、平成22年度から4年間の中学校国語科における様々な取り組みを「学びやすい(環境づくり)」「学びたくなる(活動の工夫)」「学び続ける(手立ての開発)」という3つのキーワードでまとめ、手島孝之氏(福岡・朝倉東小「一人ひとりの問題解決活動の充実をめざした理科学習指導」)は、



「理科は楽しいが観察や実験は苦手」な子を「問いを持ち考察し学習を生活に生かす」子に育てる実践の工夫について「メダカのたんじょう」の単元を例に具体的な手立てを明確にし、五十子晴美氏(実践時：東京・東泉小「《子供が主役の授業づくり》学びたい調べたいと思う学習活動の工夫」)は、「マイプラン学習」と名付けた「2教科同時進行単元内自由進度学習」による授業の作り方と子どもの主体的な学びの様子について4・5・6年の国語・社会・算数・理科の単元から具体事例を発表した。

紙面の都合で各発表の概要は割愛するが、3つの発表に通底していたのは、どの教科学習においても教科書教材の構造とねらいを指導要領レベルで読み解き、目の前の子どもに応じたオーセンティックな学習を実現する単元をデザインして、学習材の開発に手間を(現地取材や実物蒐集など)惜しまず、子ども一人ひとりが考えたことや学んだことの足跡が毎日の授業で残る(成果を視覚化できる)ワークシートや学習材や学習環境をつくり、学習の成果や努力をほめて励ますフィードバック(朱書きのコメントや日々の声かけ)を実行すること、であった。どの発表も長年の継続的な実践研究から得られた知見や具体的方法

が凝縮されており、各実践の全貌を理解するのに3時間では時間が足りないほどであった。(文責 佐野)

分科会E 『語り合おう』子ども一人ひとりを大切にする支援困難な状況への対応 コーディネータ 光武充雄 (九州個性化教育学会会長・臨床心理士)

実践報告・協議：この分科会Eは、分科会Bに引き続き、その実情に深く迫り、明日への元気とヒント



が得られたらという願いで設けられました。まず、佐賀県の中村玲子先生から、実際に取り組んだ、小1女子と小6男子の事例をご紹介していただきました。いずれも、こだわりが強く、勝負に執着し、自分の思い通りにいかないと、カッとなったり、暴言を吐いたり、教室から逃避したりなどの症状を持っており、中村先生からは、そうした状況にどう対応したか、効果的だったことと課題となったこと等を赤裸々に語っていただきました。特に、低学年、高学年に応じて、学級のルール作り、がんばりカード、ソーシャル・ストーリー、がまんカード、視覚的情報の提示、落ち着いた教室環境等、具体的な手立てを考えて、積極的に実践された点は、手をこまねている状況が多い中で、たいへん注目されます。実際に、その温かい姿勢と行動力が他の子どもたちにもいい影響を与え、その子を親和的に包み込んだこと、他の子が、がまんカードを自分もやりたいとせがんできたこと、さらには、保護者の心が和らぎ、信頼関係につながったことなど、プラス・スパイラルが展開されています。たいへん感銘を受けました。

こうした状況は、今やどこの学校にもある問題です。指導支援がなかなか届かないこと、個別の支援が必要だとは思っていても、一斉指導や集団活動の中ではなかなか組み込めないこと、さらに、他の子どもたちにも伝染し、学級崩壊に向かったり、教師が自信を無くしたり、マイナス・スパイラルの連鎖が起ってしまうことなどの意見も出されました。この課題には、学校内の関係性と活動性の質的改善が求められています。そこに個性化教育の出番と役割があることを強く考えさせられた一時でした。(文責 光武)

シンポジウム 子ども一人ひとりを大切にするという原点に立ち返って

コーディネータ 川原俊彦 (佐賀県教育センター)

シンポジスト 成田幸夫 (岐阜聖徳学園大学) 澤田 稔 (上智大学)

猪俣亮文 (仙台市教育委員会) 田島隆一 (佐賀県嬉野市立嬉野中学校)

成田：現在の状況は、閉塞的な学び・結果主義・復古の気配。苔むした学力観がはびこっている。これは、教師が意識改革を怠ったからだ。子どもたちは学びたがっている。PISAで学力が向上したのは、ゆとり教育と、生活科・総合が要因。子ども一人ひとりを大切にするという原点は、「応じようとする個をとらえる」という個性化・個別化の原点回帰を誠実に行うことである。ロマンを語る教師たれ。

澤田：「一人ひとりの子どもを大切にするという政治的意味」というタイトルで、視点を変えて教育における政治的を考えてみたい。「政治性」

には狭義と広義がある。広義の政治性としては、集団的イメージよりも一人ひとりの個性が大事なのに、これをどうつくるかを政治は示さない。民主主義の危機とも言える状況である。一つの回答として、Mission Hills Schoolを紹介する。学校は幼稚園的で家のような場となるようにすべきであり、子どもをケアする場として一人ひとり「承認」の場たるべきであると考えている。

猪俣：20年前の新設校南吉成小学校の4年間の実践が原点と言える。指導の個別化、学習の個性化、TTなどに取り組んだ。当時の子どもたちは、保護者の過干渉・過保護の影響で、指示待ち・他律的で自信がなく、不登校やいじめなどの問題が多かった。子どもたち一人ひとりにとって魅力的な学校にするため



に、基本的な考え方、子ども観、授業観を見直した。「子どもの心が見える教師」「子ども一人ひとりの将来の可能性を拓く教育の実現」「子どもの側に立ち、子どもの立場になりきっての授業づくり」を目指した。
田島：平成24年度の新学習指導要領の解説書の作成に関わる。その後は「総合的な学習の時間」を根付かせたいと努力してきた。しかし、中学の「総合」は見放されている。「総合」がなくなると思っている人は管理職も含めて多い。川登中学校では、学校生活の環境を変える取り組みをした。「総合」を経験した子どもたちの感想が示すように、主体的で意欲的な学びの姿があった。自分の成長を感じていた。子ども一人ひとりの個性・学力、自ら学ぶ力を大切にしたい。中学生はやっかいだが、エネルギーを持っている。子どもを信じて一人ひとりにしっかり目標を持たせたい。

《フロアからの質問と回答をまとめて》

質問：職場へ帰って実践を進めるには何が必要か、何が課題か。持って帰るものは何か。

成田：◎中学校の先生は加速度的に変わる。学校の姿や生活を変える。◎何を指導するのかを示すと同意しやすい。生きること、働くこと、これだったら共有できる。◎個性化、個別化への圧力と闘って行かなければならない。ロマンを持って実践することが必要。◎私たちは子どもの将来に責任を持つ。◎やってみたいと思う教科書以外の実践、新しい学校づくりをしてほしい。◎先生方は楽しんでいるのかな。

澤田：◎敵は「管理職・校長」と言われる。同志が3人いれば学校が変えられる。◎単元内自由進度学習を薦めたい。実践してみることやネットワークの利用が大事。◎生きる力はガイドラインを示したが具体的な正解がない。答えを聞きたいと思うのはだめ。依存性の再生産である。◎アメリカの実践は闘いの結果できたもの。

猪股：◎小学校の担任にはいろいろなことができる。◎構えが大事。◎時間的空間的余裕がほしい。◎しっかりと目の前の子どもたちをとらえていますか。先生が一番気がかりな子どもが大事。

田島：◎先生はうまく学習活動を作らなければと思っている。それがおどしと恐喝になる。◎自分がしようと思わないといけない。自分はこんなことをやっているけどと報告してほしい。◎知的好奇心をもって先生が「探している」姿が大事。◎子どもの出番があるか。自分の勉強が可能性を生かす場になっているか。(文責 佐久間)

《お知らせ》

来年度の第8回全国大会は、関西個性化教育学会を中心に、以下の日程で開催の準備を進めていただいています。なお、詳細につきましては、随時決まり次第学会のHP上にアップするとともに、改めて、1次案内(2015年4月頃)、2次案内(2015年6月頃)としてご案内申し上げます。

開催地：兵庫県神戸市 会場：神戸国際大学
開催日：8月8日(土)～9日(日)
併せて開催の免許更新講習は、選択講習が例年通り学会日程を含む8月7日～9日、必修講習が引き続き8月10日、11日の両日に開催の予定です。
神戸国際大学を会場に、連続する5日間で免許更新講習のすべてを終えることができます。
該当の先生方は、是非この機会をご活用ください。

※ 今回同封の「諏訪市立高島小学校 公開学習指導研究会」の裏面「あいこちゃんに心臓移植を」は、同小学校の1年生児童「小松愛子」さんに関わるものです。ご理解とご協力をお願いいたします。

<事務局への問い合わせ・連絡先>
庶務部長 佐久間 茂和
〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷3-9-14-510
TEL 048-678-1681
e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp
日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会会報 第22号
平成26年9月13日発行
編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 多田 信夫